

Ⅱ 実践報告

国語科

1 国語科の研究主題

「読解力・論理的思考力・判断力・表現力の育成を図る指導法の工夫」

研究に当たり、論理的に思考し適切に表現する上で国語力は必要であると考え、国語科では、「話す・聞く・読む・書く」力を関連させ、論理的思考力の向上を目指した。特に国語力の中でも「聞いて、論理的に考えて、話すこと」「論理的な文章を、考えて書くこと」「読んで考えること」を重要と考え、3点を具現化できるように指導法の工夫を図った。

2 研究の概要

平成21年度より移行期間に入る新学習指導要領では、国語以外の教科の中にも「言語活動」を取り入れることが示されているが、それは生徒がよりよい未来を目指し、生き方を考え、社会に進出していく上で、「論理的に話す・聞く」が重要視されているということである。国語科では、新学習指導要領との関連を明確にし、大単元末に表現活動を入れるなど、生徒の意欲を絶やさずに確かな国語力を身に付け、社会で活躍できる人材を育成したいと考えている。

3 19、20年度の取り組みからの考察、課題

私立中学校への入学者が多い状況の中、学校選択制により様々な学習状況の子どもが入学し、学力不足や、学習習慣不足の生徒がいる実態が挙げられる。特に学習力サポートテストの結果から、各学年で識字力・古典の読解力・説明的文章の読解力が不足していることが懸念される。しかし、学習意欲の高い生徒を増やし、家庭の協力を得ながら学習習慣を定着させ、意欲を高める授業を工夫することや、サプリノートの活用、6スパンごとの学習面談を実施することで学力は向上すると考えられる。

4 21年度の取り組み

(1) 学習計画の立案

大単元末に表現活動を入れるなど、新学習指導要領との関連を明確にした学習計画を立案した。また、表現活動の指導の工夫として、生徒の意欲を絶やさずに確かな国語力を身に付けるために、スキット、ディベート、ロールプレイ、インタビュー、パネルディスカッション、視聴覚機器を活用したプレゼンテーションなど多様なスキルを用いた。

(2) 「放課後の補習」と、「朝学習の時間を活用した漢字コンテストの取り組み」

今年度、国語科の取り組みの中で、「放課後の補習」と、「朝学習の時間を活用した漢字コンテストの取り組み」がある。識字力や語い力を高めるために、学期に1回計画的に漢字コンテストを行った。教育・常用漢字1945字、約6000語の熟語の範囲から発達段階に沿って50題出題する。範囲の学習は朝学習や家庭学習を中心にし、基礎学力の定着を図った。優秀者・優秀クラスは表彰し意欲を高め、80点に達しない生徒は合格するまで追試や補習を行うが、学年・学校全体の平均点は90点以上であったのでよく取り組んでいたと言える。学年・学級の担当教員も一丸となって、生徒への支援を惜しまなかった。実施学年の識字力は向上し、学力調査や漢字検定の得点力に直結し、基礎基本の定着を図る一歩となった。

(3) 課題作文

2000字・4000字・6000字・12000字・20000字の課題作文を、論理的に考えて書く練習を、1年次から計画的に行い、発表原稿として4000字が1分程度と習得させておく。その成果の検証として平成21年度「中学生の主張」で中学1年生が特別会長賞を、「中学生の税についての作文」で全国納税貯蓄組合税務署長賞初め12名が中学1・3年生で受賞したことがあげられる。

5 具体的な実践例

(1) 新学習指導要領と関連した新しい学習指導案と言語活動例

「話し合って考えよう」「伝え合うために」～ディベート形式の討論を手法として～
主教材 「話し合って考えよう」「伝え合うために」

(中学校国語Ⅰ 光村図書出版)

① 目標とする力：本単元を通して身に付けさせたい言語能力

ア 人との交流を通して話し合うために集めた材料を読み解く能力・技能

(第1段階 準備)

イ 話題や方向をとらえて的確に話し合う能力・技能

(第2段階 活動)

ウ 話し合ったことをもとに、自分の考えをまとめる能力・技能

(第3段階 分析・熟考)

② 学習指導要領との関連

ア 目標

目的や場面に応じ、日常生活にかかわることなどについて構成を工夫して話す能力、話し手の意図を考えながら聞く能力、話題や方向をとらえて話し合う能力を身に付けさせるととともに、話したり聞いたりして考えをまとめようとする態度を育てる。

イ 内容 A 話すこと・聞くこと

(ア) 指導事項

(i) 日常生活の中から決めた話題について、人との交流を通して話し合うための材料を集めること。

(ii) 全体と部分、事実と意見に注意しながら話を構成し相手の反応を踏まえながら話すこと。

(iii) 話し合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめること。

ウ 言語活動例（関連する言語活動例の明示）との関連

(ア) 日常生活の中の話題について対話や討論などを行うこと。

エ 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項との関連

(ア) 音声の働きや仕組みに関心を持ち理解を深めること。

(イ) 語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関連に注意し、語感を磨くこと。

③ 単元（題材・教材）名

「話し合って考えよう」「伝え合うために」～ディベート形式の討論を手法として

(4時間扱い)

使用資料

●ディベート授業実践記録ビデオ（平成6年～公立中学校記録、平成18・19年度都

立両国高等学校附属中学校) ○『国語力の向上に関する教育推進会議検証授業』
(授業者：渡辺雅美 指導助言：元国立国語研究所長 甲斐陸朗 他) ●自作ワーク
シート・評価カード

④ 単元(題材・教材)設定の理由

教科書教材の中で設定された身近な話題について、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団としての考えを発展させることで、思考力・判断力・読解力を高めたい。本単元ではディベート形式の討論を用いて議論を深め、より高次の解決策に至る経験を与えて、社会で活躍できる人材を育成したい。

生徒は、入学当初より200字・400字の課題作文に取り組んでおり、1分間のスピーチとして400字程度の原稿が必要なことを体得している。資料から得た論拠と感動を、発表時間に応じた内容や表現で発表させたい。また、モデリングを行うことでより効果的な話し合いの指導を行いたいと考える。

⑤ 指導上の工夫 授業の特色

ア ディベート形式の討論については中学校課程3年間で計画的に4回実施する。(『話す・聞く』領域年間指導総時間数18時間のうち4時間程度を1回のディベート授業に充てる。他14時間については、単元の関わりの中でスキット・ロールプレイ・インタビュー・視聴覚機器を用いたプレゼンテーションなどに充当する。)

イ 公教育・教科の特性から、中学1・2年生で社会問題を扱うことは避け、教科書学習材にあげられる『身近な話題』や『文学的文章及び説明的文章』に論題を求めたディベートという形式をとる。

ウ 指導のねらいや学習材に応じて、教科横断的なディベートやプレゼンテーションを行う。(例. 反駁部分英語、公民生活設計・マネーゲームからの論題設定など)

エ 生活班対抗で討論できるようにオリジナルフォーマット(形式)を用いる。

肯定側立論(3分)→否定側立論(3分)→否定側反駁(1分)→肯定側反駁(1分)
→否定側最終弁論(3分)→肯定側最終弁論(3分)各回作戦タイム有り

オ 当該教材から論題を3つ、生徒に設定させ、それぞれ肯定側否定側を各班ごとに選択し、生活班6班で対戦し、必ず全員が発表する。

カ 200字・400字・600字・1200字・2000字の課題作文を書く練習を、1年次から計画的に行い、発表原稿として400字が1分程度と体得しておく。

キ 言語活動は必ずビデオで記録し、評価や授業改善に用いる。生徒も成果と課題を確認できるようにする。

ク 授業記録を視聴しモデリングを行う。

ディベートについては、どの学級の生徒も大変意欲的に取り組み、話す力・聞く力・論理的思考力・判断力が飛躍的に向上する成果が見られたばかりでなく、実生活の場へつながり、生きて働く力としてディベート形式の討論が生徒に与えてくれるものは大きい。中学1年生にとって、今回が初めてのディベート形式の討論である。ディベート以外の言語活動については、4月当初から計画的に指導してきた。パブリックスピーキングを意識したコミュニケーション能力を養うとともに、学習意欲をさらに向上させたい。

教室で扱う教材としてはあえて教科書に採択される話題や文学的文章・説明的文章を

選択している。教科書教材ならば、作品を読み解き、論拠を探し、自由に想像力を働かせ自分の立場に立って考えを述べるができる。中学1年生の段階で社会問題に論題を求めない理由として、生徒の生活環境や思想信条に、深く立ち入らないためである。

⑥ 単元の評価規準


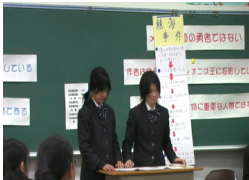
ア 日常生活の中での話題について、話し合うための材料を人との交流を通して集め、集めた資料を読み解き工夫して話を構成している。(準備)

イ グループディスカッションやディベート形式の討論を通して、話題の方向性をとらえ、的確に話したり、自分の考えとの共通点や相違点を整理したりしながら聞いている。(活動)

ウ 聞いたことや話し合ったことをもとに、自分の考えをまとめている。(分析・熟考)

⑦ 指導・評価の計画(4時間扱い)

段階	時	過程	教師の意図・指導内容 学習活動	指導上の留意点		
				生徒への支援	評価規準 評価方法	
準備	1時間目	目標：本時の目標：①学習目標を理解し、ディベート形式の討論に関心・意欲をもつ ②教科書「伝え合うために」のテーマの中から、討論の話題を選択する。				
	導入	学習目標・学習計画の提示	・発表および自己評価も含めて、4時間計画で初めてのディベートに取り組むことを告げる。	評価規準	・ディベート形式の討論に意欲をもつ。 ・討論の話題について積極的に話し合う。	
	展開	活動1 ・ディベートガイダンス 肯定否定側立論(各3分)→否定肯定側反駁(各1分)→否定肯定側最終弁論(各3分) ・授業実践ビデオ視聴	・今回教室で行うディベートのフォーマットと主張の話型例を説明する。(板書) ・形式が理解できるように、授業実践ビデオの一部を視聴させる。	評価方法	・観察・発言 ・話し合いの様子 ・ノート	
	まとめ	活動2 ・テーマの提示・論題設定 ・肯定側否定側の選択 ・班の中での役割分担決定	・教科書からテーマを提示し対立項となる論題を考えさせる。 ・班で話し合い論題と肯定否定を選択させ、役割分担を決定させる。			
			本時のまとめ・次時の課題	・討論に必要な資料を集めることと、テーマに沿ってメリット・デメリットを考えるよう指示する。		
2時間目	本時の目標：班での交流を通して意見を交換しながら、話し合いのための資料を集め、話す内容を構成する。論拠となる表現を探し、構成を工夫して討論のための原稿を書く。					
	導入	本時の学習活動の確認	・各自で探した資料を確認する。	評価規準		

			<ul style="list-style-type: none"> ・本時の活動を指示する。 ・肯定側主張班3班と否定側主張3班を分割し、別教室で指導する。(少人数授業・教師2名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・交流を通し、話し合いのための資料を集める。 	
	展開	活動1 グループディスカッション	<ul style="list-style-type: none"> ・各班の主張の論拠を、持ち寄った資料から探させる。 ・討論に有効な内容の骨子を、話し合って構成させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を整理し、構成を工夫して討論のための原稿を作成する。 	
	まとめ	活動2 討論のための原稿作成	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの内容を基に、各担当の原稿を工夫して作成させる。 	評価方法	
		本時のまとめ・次時の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・次回が討論会であることを予告。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの様子 ・原稿 	
活 動	3時 間目 本時	<p>本時の目標：①工夫して構成した話を相手の反応を踏まえて話す。 ②話し合いの話題や方向をとらえて的確に話し、相手の発言を注意して聞き自分の考えをまとめる。</p>			
		導入	<p>モデリングを行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中1の同じ生徒の1・2の動画を視聴し、それぞれ良い点を指摘する。 ・生徒の変容を理解し、よりよく伝えるにはどのような話し方がよいか意見を言う。 	 <p>1. 中1 6月</p>  <p>2. 中1 1月</p>	評価規準
		展開	<p>活動1 シミュレーション</p> <p>○本時の目標と学習内容とモデリングを踏まえて、各班で立論・反駁・最終弁論の練習を行う。</p> <p>○発表者・視聴者・タイムキーパーはそれぞれのフロアに移動、準備する。</p>	<p>グループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各班で一斉に立論・反駁・最終弁論の練習を行う。 ・本時の目標と学習内容を理解させ本時の言語活動の実践に向けて、発表者は自信を持って臨むように、視聴者は理解を深めるように励ます。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体と部分、事実と意見に注意しながら話を構成し、相手の反応を踏まえて話す。 ・話し合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめる。
			活動2 ディベート発表論 題①②③から2つ	ディベートフロア	<ul style="list-style-type: none"> ・評価のポイントを視聴者に伝

	まとめ	<p>①論題「お礼を伝えるのにメールがよい・手紙がよい」について発表する。</p> <p>②論題（案）「調べ学習にはインターネットがよい・図書館がよい」について発表する。</p>	<p>え、発表者にもルーブリック評価を明示しておく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビデオ撮影・記録を行う。 ・ディベートがスムーズに進行するように支援する。 ・判定のコールを行う。 ・フロアの生徒には、評価カードに得点を記入させ、判定させる。特に心に残った生徒や意見は記入するように指示する。 	<p>式の討論発表者は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話す様子 ・聞く様子 <p>フロアの視聴者は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価カード
		本時のまとめ・次時の課題	③のディベートは次回行うこと、自己評価と振り返りも行うことを予告する。	
4時間目	<p>本時の目標： ①話し合いの話題や方向をとらえて的確に話し、相手の発言を注意して聞き自分の考えをまとめる。</p> <p>②活動を振り返り、成果と課題をまとめる。</p>			
分析 熟考	導入	導入の学習活動	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の活動を評価し、本時はよりよい討論ができるように励みます。 	<p>評価規準</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体と部分、事実と意見に注意しながら話を構成し、相手の反応を踏まえて話す。
	展開	活動1 ③ 論題（例）「小中学生にとって携帯電話は必要である・ない」について発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ディベートがスムーズに進行するように支援する。 ・判定のコールを行う。 ・フロアの生徒には、評価カードに得点を記入させ、判定させる。特に心に残った生徒や意見は記入するように指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの話題や方向をとらえ、的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめる。
	まとめ	活動2 自分の考えをまとめ、自己評価を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに各自の成果と課題をまとめさせる。 	<p>評価方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価カード ・振り返りシート
		全体のまとめ・次時の予告	<ul style="list-style-type: none"> ・ディベート形式の討論について振り返り、成果と課題をまとめる。 	

(2) 文学的文章の読みを深める言語活動を取り入れた学習指導案例

① 単元名 第3単元「状況に生きる」 『故郷』

② 単元の指導目標

- ア 小説の場面や登場人物の設定の仕方をとらえて内容を理解し、主題をつかむ。
(読解力)
- イ 小説を読んで人間、社会、時代背景などについて考え、自分の意見をもつ。
(思考力・判断力)
- ウ 目的や場面に応じて適切かつ効果的に話す。表現の工夫を評価して聞く。(表現力)

③ 単元の評価規準

<関心・意欲・態度>

小説に関心をもち、進んで内容を読み、インタビューに参加しようとする。

<話すこと・聞くこと>

目的や場面に応じて効果的に話している。発表を評価しながら聞いている。

<書くこと> 抽象的な概念を経験等含め具体的に自分の言葉で表現している。

<読むこと> 情景や人物の描写に着目し、登場人物の気持ちや主題を読み取っている。

<言語事項> 世代や地域性による言葉の違いを理解し、敬語を適切に使っている。

④ 学習指導計画（全9時間扱い）

第1時 学習計画提示・導入・全文通読・一次感想

第2時 読解① ワークシート1「過去と現在の違いを読み取ろう（風景・登場人物）」

第3時 読解② ワークシート2「わたしとルントウの関係はどう変化したか」及び「作者について」

第4時 読解③ ワークシート3「作者の『希望』とは何か」

第5時 読解④ まとめ 及び「中国社会について書こう」

第6時 インタビュー形式スキットの説明・評価カード説明・役割分担・原稿作成①

第7時 原稿作成②

第8時 インタビュー発表会 **本時**

第9時 単元の振り返り・まとめ（教科書ワーク）

⑤ 本校の研究における位置付け（単元設定の理由）

ア 教材の価値

社会や時代は激しく変動するが、人間は置かれた状況に屈せずに生きようとする。この作品を基に、生徒が中国という他国の社会状況や時代を想像しつつ、現代の日本社会と比較して自分の生き方を見いだすことができることを期待する。『故郷』という作品は、作者の魯迅が中国国民に「真に」自立して生きることを願いつつも、その方法に悩みながら書いた作品である。中国人として、また一人の人間として心の解放を求めた作者の姿や、登場人物に描いた国民の苦しみや未来への希望をとらえさせ、作品の主題に迫る。本単元では、前半で読解を中心として、登場人物の状況や気持ちを理解する学習により、読解力、思考力、判断力を高める。後半は、適切な言葉でインタビューに答える学習を行い、共感的な表現や批判的な表現を学び、読解・思考・判断の上で表現力を高めることをねらいとする。

イ 生徒の実態（既習内容）と本単元の指導について

第1学年では『少年の日の思い出』を題材にして、弁明する主人公とその友人の会話を想像し、台本を作った。第2学年では『走れメロス』を題材に、抽象的な言葉や登場人

物の行動を熟考し、グループディスカッションを行った。生徒は意欲的に取り組み、仮説を立てて小説の内容を読んだり、内容を踏まえて話したり、聞いたりする力が向上するなどの成果がみられた。生徒が経験している言語活動は、対話や小グループの話し合いで1人や数人を相手に話すことだが、今回は初めてのインタビュー形式である。1学期に学習した敬語表現や、演じる登場人物の年齢・人柄・心情、主題などを考慮して、大勢の聴者を対象に、効果的に話す力を養うとともに、豊かな表現やスキット内容を評価することで、さらなる学習意欲の向上を目指したい。

⑥ 本時（全9時間中の第8時間目）

ア 本時の目標（生徒に身に付けさせたい力及び研究主題との関連）

- 登場人物の置かれた立場で、心情を告白したり、状況を説明したりする。（表現力）
- 敬語を使い、世代や地域性など登場人物による言葉の違いを意識して表現に工夫をする。（表現力）
- 発表が小説の内容や主題に沿っているかを評価しながらスキットを聞き、考えを深める。（思考判断力）

イ 本時の展開

過程	生徒の主な学習活動	◎支援 ◇留意点
導入 5分	○本時の目標と学習内容を確認する。 ○発表者・視聴者はそれぞれの場所へ移動する。	◇評価カードを配布し、2つの観点をA・B・Cの3段階で評価することを説明する。 観点1 内容に沿って心情告白している。 観点2 表現が豊かで効果的である。
展開 35分	○インタビュアーが、「わたし」「ルントウ」「ヤンおばさん」「魯迅」に質問し、それぞれが答える。 ○視聴者はインタビューを聞いた後に、評価カードに記入する。 (インタビュースキットについて) *インタビュースキットは各班8分～10分。評価カード記入は2分。 *グループの人数は4人～5人。5人の場合は「わたし」を2人に演じさせる。 *視聴者がインタビュアーになる。 インタビュアーの評価は行わない。	◎発表者に準備原稿を基に自由に話すよう促す。 ◎視聴者への机間支援。 (発表する姿勢、聞く姿勢を観察して整えさせる。) ◎評価が書けずに止まっている生徒には、具体的なポイントをヒントとして与える。 ◇他の生徒や教師の評価が、個人の評価カードに反映されないように感想や反省は「まとめ」で述べるようにする。 ◇本時で3グループ発表できるように時間を調整する。
まとめ 10分	○本時の感想・反省を述べ合う。 ○次回の学習についての説明を聞く。	◇発表者・視聴者それぞれの感想や反省を聞く。 ◎感想が言いにくい生徒には、評価カードを参考にして、褒められる点、特に良かった点を発言させる。

ウ 評価規準

< 関心・意欲・態度 >

インタビュー形式のスキットに積極的に参加している。(観察)

< 話すこと・聞くこと >

小説の内容を理解して登場人物の心情を告白したり、状況を説明したりしている。

(観察・準備原稿)

発表が既習内容に沿っているかに着目し、適切に受け止め評価している。

(評価カード)

< 言語事項 >

言葉の使い方に注意して適切な敬語を使うなど、表現に工夫をしている。

(観察・準備原稿)

6 研究のまとめと来年度への課題

落ち着いた授業の雰囲気作りと、意欲を高める言語活動の授業を工夫することで、生徒の基礎・基本となる学力は向上したと考える。同時に、集めた資料や文学作品の読みを深め、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団としての考えを発展させることで、思考力・判断力・読解力・表現力も高まったといえる。今後は議論を深め、より高次の解決策に至る経験を与えて、社会で活躍できる人材を育成したい。